平成 16 年 6 月の解説（週間天気予報）

【6 月の天候状況】

北日本から西日本にかけて晴れて気温の高い日が多く、北海道から九州にかけての 32 地点で月平均気温の最高値を記録しました。特に北海道では月平均気温が平年値を 2℃以上も上回りました。

6 日から 7 日にかけて梅雨前線が北上して、近畿地方から東北地方にかけてほぼ一斉に梅雨入りしましたが、全般的にみれば梅雨前線が日本の南海上に南下して不活発だった日が多いため、広い地域で平年の降水量を下回りました。特に九州地方では平年の 30%以下となった所が 5 地点もあり、牛深（熊本県）の月降水量は 52.0mm（平年の 13%）で、月降水量の最小値を更新しました。一方、東海地方と南西諸島などでは、11 日と 21 日に上陸した台風の影響も加わって、降水量が平年を上回りました。

また、日照時間は、東北地方の日本海側と南西諸島を除いて、広い地域で平年を上回りました。特に関東地方と九州地方では平年の 150%以上の日照時間となった所もあります。

昭和 26 年以降の統計によると、6 月としては最多の 5 個の台風が発生し、そのうち台風第 4 号と第 6 号が、ともに高知県に上陸しました（6 月の上陸数 2 個は平成 9 年と並んでタイ記録）。

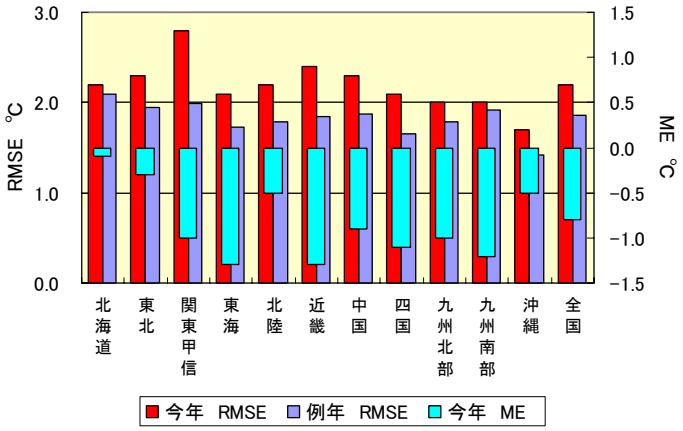
【6 月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3 日～7 日目の平均）は、全国平均で例年（注）（1992 年～2003 年の平均）より 9 ポイント高い 71%でした。特に関東甲信地と九州北部地方は例年より 16 ポイント高くなっています。

最高気温の予報誤差（RMSE）は、全国平均（2 日～7 日目の平均）で例年（1995 年～2003 年の平均）より 0.3℃小さい 2.6℃で、特に東海地方は例年より 0.8℃小さい 2.2℃でした。

一方、最低気温の予報誤差は、全国的に例年より大きく、全国平均で例年より 0.3℃大きい 2.2℃でした。月平均気温が高かった影響で、最低気温の系統的な誤差（ME：平均誤差）が月平均で 1℃以上低くなった地方が半数あり、全国平均（2 日～7 日目の平均）では－0.8℃でした。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。



最低気温の予報誤差（RMSE）と系統的な誤差（ME）

全国的に予報誤差（RMSE）■が例年■より大きく、系統的な誤差（平均誤差 ME）■は負となっている。

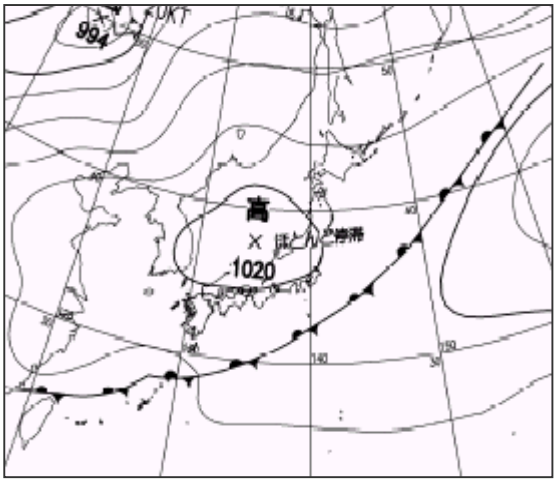
【6 月の週間天気予報から】――南海上からの低気圧で活発化した前線の活動――

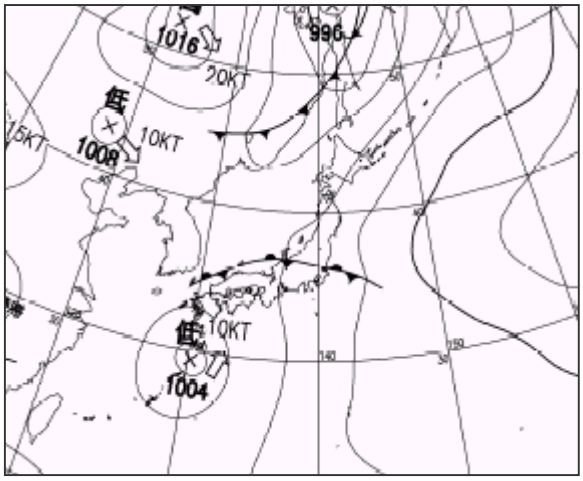
この時期は、南からの暖かく湿った空気により前線の活動が活発になるか、北側の高気圧の影響で前線が南下して活動が不活発になるかによって、日本付近の天気が大きく左右されます。また、予報期間中の前線活動の状況は、梅雨入りするかどうかを決める上でも重要です。

1 日に発表した関東地方の週間天気予報では、5 日まで晴れて、6 日と 7 日は北日本を通る弱い気圧の谷の影響で曇るが、前線の活動は不活発であると考えていました。しかし、4 日に

沖縄の東海上で発生した低気圧は5日まで停滞気味でやや強まり、その後ゆっくり北上をはじめ、6日から7日にかけて九州の南海上から本州付近に進みました。

この影響で、低気圧からの暖かく湿った空気の補給で活動を強めた前線が山陰沖から東日本にかけて停滞したため、近畿から東は6日から7日にかけて梅雨入りし、関東地方も6日と7日に南部の地域を中心にまとまった雨が降りました（横浜では合計92㎜の降水量を観測）。





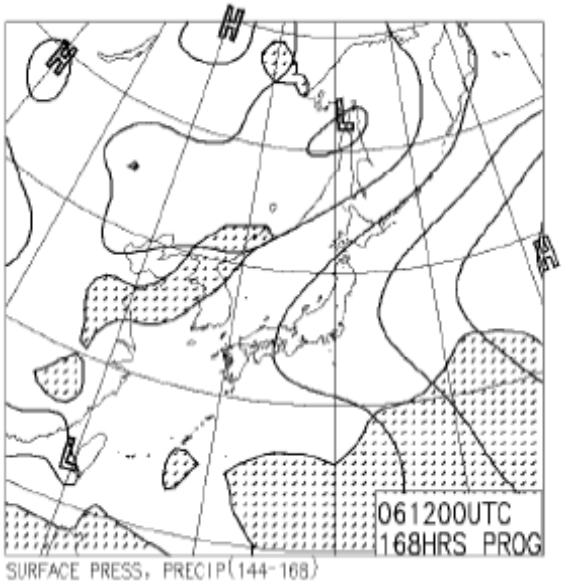
図左上　1日21時の地上天気図

図右上　6日21時の地上天気図

西日本～東日本の広い範囲で雨となった。

図右下　6日21時の予想天気図（1日発表）

前線は朝鮮半島付近で停滞すると予想した。



【8月の天候の特徴と週間天気予報の利用に際して】

台風が発生する数は8月（平年値5.5個）が最も多く、日本への上陸数（0.9個）も9月と並んでいます。

現在の予報技術では、3日目以降の台風の進路を精度良く予報するのは難しいため、進路予報は72時間までです。このため、週間天気予報では概況欄に「台風第xx号の今後の進路によっては期間中頃の予報が大きく変わる可能性があります」という表現で、予報期間中に台風の影響する可能性について記述しています。気象庁HPなどの週間天気予報を利用するときには概況欄のこうした記述にも注目してください。

なお、8月における週間天気予報の「降水の有無」の全国平均の適中率（3日目～7日目平均）は、平均（1992年～2003年）で65%です。